日本工業大学通信

発行所
日本工業大学
広報課
埼玉県南埼玉郡宮代町
郵便番号345
電話04803（4）4111

行事予定

6・29 学園創立記念日（休校）
7・11－9・3 夏季休暇
7・12－7・13 補講
9・4 講義開始
9・16－9・29 前期末試験
9・30－10・4 休校
10・5 後期講義開始

第十回入学式学長告辞

本日は本学第十回目の入学式を迎えることになりましたが、諸君入学おめでとうございます。本日より諸君は大学生として新しい学生生活の門出にふみ出されるわけで、そのおめでたい時に恐縮ですが、いささか所懐を述べたいと思います。

まず諸君にお尋ねしたいのは、諸君はどういう意識をもって大学に入って来られたのかということです。もう一度自分の胸に手を当てて、じっくりと反省してみていただきたい。入学した動機はいろいろと人によって違いましょう。友達が入るから何となく入ったとか、もう少し青春を自由に暮したいなどと考えた人もありましょう。しかし大学には厳然とした目的と使命のあることを忘れないで下さい。大学は決して高等学校の延長ではないのです。戦前の旧制大学は、研究と教育の中で、むしろ研究に重点があって、教育は従であります。しかし戦後新制大学に移って、大学が大衆化するにおよんで、大学は教育が主となり研究が従となってきましたが、しかし依然として大学は学問の府であり、人間形成の場でもあります。

以前にわたくしは学生諸君と膝を交えて話をしました折に、当時の諸君が工業高校で受けた教育が詰め込み主義、暗記主義であったことを知りました。驚いたことに数学でさえ暗記ものだといった人がありました。しかし大学は全く別です。大学は物を考えるところです。先生から教えられることを、ただ覚えるということでなく、自ら勉強して、物を考えるところなのです。本学のような私学では、大勢の学生諸君を扱っていますので、一人一人の手をとって教えるだけ先生の余裕はないのです。

しかしそのように手をとって教えてもらうことだけを期待すること自体が誤っているのであって、大学は自ら勉強し、先生はそれを指導するのが建前なのです。だから自ら勉強する意志のない人は、大学へ入ることが間違っているのです。

学生諸君の中に、大学へ入って来ても、工業高校と同じことを教えていてつまらないという人があると聞いています。本学は工業高校の卒業生を主として入学させる日本で唯一の大学ですから、このようなことを言われないように、特色のあるものとしたいと、先生方と共に今もなお検討をしているところです。

しかし工学には一つの体系があって、それから全く離れた教育をすることは、将来とても不可能で、同じことが出てくることをさけるということは、不可能と考えられます。しかし同じことが出て来ても、その定理や事実をただ暗記するのでなく、そのことが出てくる過程をよく考えてみるところに、大学の大学たる所以があるのです。ですから同じことが出て来ても、取扱い方が異るから差支えないのですが、もし諸君がそれが同じことでつまらないと考えるならば、それは諸君の頭脳の進歩が停止してしまったことを意味するのです。学問というのは深いもので、突込めば突込むほど興味もわいてきますし、疑問も次から次へと出来るはずです。

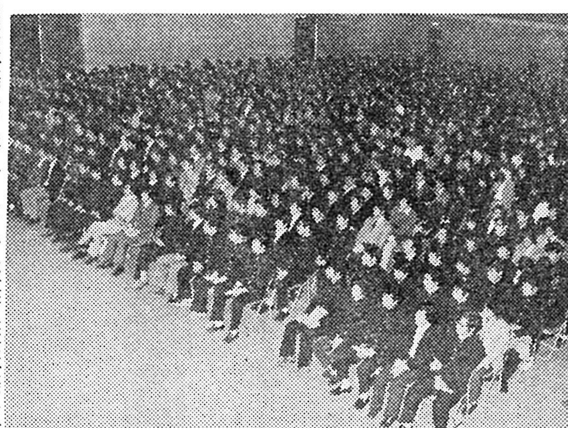
そうして出て来た疑問を先生方のところへ尋ねに行くならば、先生方も喜んで応じて下さるでしょう。しかし先生方とても万能ではありませんから、その疑問に答えられないことも起るでしょう。その時は先生と共に、その疑問を解明するために研究するのです。それが大学というものです。

最後に大学の使命の一つである人間形成について考えてみたいと思います。新制大学では人間形成のために教養科目をおいております。しかしそれは人間形成のための一助となるもので、教養科目の単位をとったからといって人間形成ができたといえるものではありません。

人間形成は友人との交際、先生との交流などの間に、自然に育成されるものですから、クラブ活動なども有意義でしょう。特にスポーツはよいと思います。スポーツにはファイトが必要ですが、このファイトはまた勉強にも通ずるものと思えます。どうかこの四年間を、諸君の人生の中における有意義なものとするよう心掛けて下さい。諸君の成長を祈りまして、祝辞と致します。

◇　◇　◇

最近撮影した本学の全景



4月10日入学式から

新任教員の紹介

枝村吉三教授（英語）

大正二年一月十二日生。東京帝国大学大学院終了。前宇都宮大学教養部教授。S・T・コウルリジ関係の著書、論文がある。

町山忠弘教授（機械工学科）

昭和四年十一月十八日生。早稲田大学大学院終了。前早稲田大学理工学研究所教授。「自動制御の現場技術」など多数の著書、論文がある。「自動制御及演習I」、「同II」、「制御機器I」、「同II」、を担当。

広川勇一郎教授（建築学科）

大正九年三月十八日生。東京美術学校卒業。前（株）ショックベトン・ジャパン営業部次長。「耐火被覆材としてのPC」などの論文をはじめ、数多くの建物の実施設計がある。「建築設計製図B」を担当。

杉本安次郎教授（システム工学科）

大正九年一月十六日生。東京物理学校卒業。前日軽アルミニウム工業株式会社技術部参事。アルミニウム部門の権威で、「アルミニウム表面処理ハンドブック」などの著書、論文があるほか、生産面でもかなりの業績がある。工学博士。「表面工学」、「機械材料」、「工業材料III」を担当。

斉藤次郎教授（システム工学科）

明治四十五年二月十一日生。京都大学工学部卒業。前大阪工業大学教授。著書に「建築の足場」などがある。工学博士。システム工学科の「構造力学」のほか「建築材料」、「建築計画A」を担当。

昇格

酒井茂紀講師（実験担当）

窪田英毅講師（実験担当）

佐伯正盛講師（電気数学IIおよび同演習・実験）

酒井　誠講師（保健体育）

寺尾　裕講師（数学）

電話番号変更のお知らせ

〇四八〇三（4）四一一一（大代表）

新非常勤講師

昭和五十一年四月一日付委嘱

◎機械工学科
鈴木　清講師（機械工学実験）
◎電気工学科
香西茂男講師（電波法規）
◎建築学科
岩崎　渉講師（都市計画）
◎システム工学科
本間鶴千代講師（数値計算・数理計画法）▲樋川和伸講師（電算機計算法）
◎一般教養
▲渡辺紘良講師（歴史学）▲狐崎直樹講師（数学）▲大森広治講師（数学）▲汁陽一講師（英会話）▲高橋泰雄講師（独語）富田正二講師（仏語）▲石黒弘講師（保健体育）

退職

伊藤　甫教授（建築学科）

昭和四十二年、本学設立と同時に就任。建築学科主任教授を務めるなど本学の発展にかなりの貢献をされたが、ご病気のために三月三十一日付任意退職。工学博士。

（機械）名取五郎氏、押切芳之氏為広重雄氏（電気）綿織博介氏（建築）山根基介氏（教養）吉田寅氏、海津聡氏、厚海博重氏、新島通弘氏、永井豊実氏、田辺武光氏

出身校別入学者数

北海道 旭川工(1) 釧路工(4) 室蘭工(1) 夕張工(1) 留萌工(2) 新得(1) 青森県 青森工(8) 五所川原工(5) 十和田工(4) 弘前工(4) むつ工(3) 岩手県 一関工(1) 大船渡工(1) 釜石工(2) 福岡工(1) 盛岡工(3) 宮城県 白石工(4) 古川工(2) 秋田県 秋田工(2) 大曲工(4) 小坂(1) 能代工(1) 由利工(2) 横手工(1) 山形県 酒田工(2) 鶴岡工(3) 長井工(2) 羽黒工(2) 米沢工(2) 山形電波工(1) 福島県 会津工(4) 喜多方工(1) 郡山工(3) 小高工(2) 白河農工(3) 平工(5) 勿来工(6) 二本松工(3) 塙工(1) 福島工(1) (私)福島工(3) 日大東北工(1) 安達(1) 茨城県 勝田工(2) 下館工(7) 総和工(6) 高萩工(2) 玉造工(4) 土浦工(8) 日立工(1) 水戸工(5) 江戸崎西(1) 栃木県 足利学園(3) 足利工(1) 今市工(3) 宇都宮工(14) 作新学院(2) 栃木工(5) 真岡工(4) 小山専(1) 鹿沼(1) 群馬県 伊勢崎工(4) 太田工(4) 桐生工(6) 渋川市立工(3) 高崎工(3) 藤岡工(4) 前橋工(4) 東京農大第二(2) 埼玉県 浦和工(8) 大宮工(20) 越生(4) 春日部工(15) 川口工(5) 川越工(4) 行田工(6) 久喜工(14) 熊谷工(12) 児玉農工(2) 玉川工(3) 秩父農工(4) 東京教育大附坂戸(1) 埼玉栄(1) 上尾(1) 川口(1) 千葉県 市川工(11) 京葉工(4) 清水(4) 千葉工(5) 千葉工商(4) 茂原工(4) 勝浦(1) 東京都 足立工(14) 荒川工(5) 岩倉工(3) 王子工(8) 葛西工(7) 烏山工(2) 関東(1) 北豊島工(3) 蔵前工(4) 小石川工(2) 工芸(1) 江東工(4) 小金井工(6) 昭和第一工(5) 杉並工(2) 墨田工(4) 世田谷工(1) 田無工(2) 東京工(125) 東京高等工科(19) 東工大附工(1) 中野工(5) 練馬工(8) 羽田工(1) 府中工(2) 本郷(4) 本所工(6) 町田工(1) 港工(2) 向島工(4) 目黒(2) 安田学園(7) 東京電機大(7) 豊島実業(3) 芝工大附第一(6) 東海大高輪台(1) 科学技術学園工(1) 京橋(1) 京北学園(1) 城北(1) 日大豊山(1) 神奈川県 神奈川工(3) 川崎市立工(1) 相模台工(2) 鶴見工(4) 向の岡工(1) 横須賀市立工(4) 横須賀工(2) 横浜商工(2) 法政大工(2) 山梨県 機山工(6) 北富士工(3) 甲府工(9) 韮崎工(3) 石和(1) 新潟県 相川(5) 柏崎工(1) 新発田商工(1) 高田工(3) 燕工(2) 直江津工(3) 中条工(1) 長岡工(2) 新潟工(4) 新潟東工(1) 巻工(1) 長野県 池田工(2) 岩村田(4) 上田千曲(2) 臼田(1) 岡谷工(5) 木曽山林(1) 駒ヶ根工(1) 蘇南(1) 長野工(2) 埴生(2) 松本工(1) 箕輪工(2) 富山県 魚津工(1) 大沢野工(2) 桜井(2) 二上工(1) 石川県 金沢市立工(1) 七尾工(1) 福井県 武生工(1) 春江工(1) 静岡県 静岡工(5) 島田工(1) 清水工(7) 修善寺工(3) 沼津工(3) 浜松工(1) 吉原工(4) 日大三島(2) 愛知県 愛知工(1) 一宮工(1) 豊橋工(4) 名古屋工(2) 蟹江(1) 岐阜県 岐阜工(1) 関商工(1) 中津川工(1) 三重県 桑名工(1) 津工(3) 大阪府 大鉄(1) 兵庫県飾磨工(1) 洲本実業(1) 竜野実業(1) 豊岡実業(1) 西脇工(4) 奈良県 吉野工(3) 鳥取県 境港工(3) 鳥取工(2) 米子工(3) 島根県 江津工(4) 益田工(1) 松江工(1) 岡山県 津山工(4) 広島県 広島市工(1) 三原工(2) 宮島工(3) 山口県 徳山工(1) 柳井工(2) 下関西高響分校(1) 徳島県 阿南工(1) 徳島工(1) 香川県多度津工(1) 三豊工(1) 愛媛県 新居浜工(1) 新田(4) 高知県 安芸(2) 須崎工(1) 高知工(1) 高知東工(2) 福岡県 博多工(1) 佐賀県 佐賀工(1) 鳥栖工(1) 熊本県 天草工(1) 八代第一工(1) 大分県 大分工(4) 日田林工(2) 宮崎県 小林工(1) 日南工(1) 延岡工(1) 鹿児島県 大島工(1) 鹿児島工(2) 加治木工(2) 鹿屋工(4) 薩南工(1) 隼人工(2) 沖縄県 南部工(1) 北部工(4) 美里工(4)

ポーランド紀行

米田桂三教授

第四〇回国際統計学会（ISI）がポーランド国ワルシャワ市で開催されるので出席することになった。同国は昔は地動説のコペルニクス、近世では放射性元素発見者のマダムキューリ、さらに現代ではわれわれ統計学徒の敬愛するJ・ネイマンを生んだ文明国である。音楽家ショパンをはじめとする芸術、文学方面にはさらに多数の逸材を古今にわたって出しているそうである。滅亡と独立を何回か繰返した気の毒な歴史をもつ反面、誇り高い民族である。以上私の予備知識や先入主を記したのは、今回の旅行で先入主が、なんとはなはだしく旅行印象を左右することかを、自分のみならず、同行者にも発見したからである。

八月三十一日、ソ連機AEROFLOTで羽田を発ちモスクワに一泊して、翌九月一日ワルシャワに着いた。ソ連、ポーランドはいずれも最近は観光政策をとっているそうで、航空機内でも市内でも撮影が自由になったのに驚いた。

ワルシャワ到着の第一印象は、市民はすべて小ざっぱりとした清潔な服装で明るいが、建造物はむき出しのコンクリートばかりで、ほとんど何の装飾もない、何と殺風景な都会か、ということだった。但し、学会場にあてられた文化科学宮殿は、高さ二〇〇メートルの塔型の立派な巨大ビルで、宮殿と言ってもおかしくないと思った。ところが、ポーランド国民はこのソ連からのプレゼントたる宮殿を、非常に軽べつしているそうである。

つらい歴史をもつ民族の心理は複雑なものらしい。第二次大戦の徹底的破壊からの復興。大部分が急造の殺風景なコンクリート製アパートだとしてもやむをえないだろう。ただ、市の東北隅に十七世紀のままの旧市街を再興して、その中に子孫たちが生活している約一平方㌔の地域は、さすがはと思わせる観光地である。市中いたる所にも武器を振り上げた銅像が多いのには驚いた。いずれも建国、あるいは独立戦争の勇士の像である。国の興亡の回数だけ、勇士の数も何倍かになるわけであろう。

強烈なナショナリズムを感じる。

到着最初の二日間は不愉快な事ばかりで、出発前の期待を裏切ること甚しく、失望した。

これは参会した日本人二十名全員が同感か、あるいはわたくし以上にそういう感じを抱いた人が中にはいたらしい。学会の事務が金銭に関してずるくてへたな。計算の根拠をただすと、説明せずにあっちの窓口へ行けというたらいまわしにされたあげく元に来ることもある。私は同じ窓口を往復したすえに相手の氏名を問うたらば態度が一変して解決した。彼らのみならず、ホテルや土産物店の従業員までも国営事業関係者であって、いわゆる官吏の〝責任のがれ〟の習性と、国の方針として〝ドルかせぎ奨励〟の気分の行きすぎが主たる原因らしい。その他にも郵便局で同一小包の重さが秤りによって大違いだったり、ばからしい経験が多く、すっかりポーランド国民がばかに見えてきた。

この気持ちが改まるきっかけは開会式後に見せられたワルシャワ大学生のバレー劇に感心したことと、前にも記した旧市街復旧の見事さと、その執念におどろた事であろう。

ワルシャワ大学生によるバレー劇

九月二日、午前の開会式で、会長のP・J・Bjerve氏の挨拶の主旨は「統計学の進歩は近年極度の専門化をもたらし、学者相互の情報交換が円滑をかき、学者と実際家との連絡も悪い。これらを相互協力と親善によって改善したい」であったが、これは本会設立の趣旨そのものである。また総理大臣や市長の話を要約すると、「社会主義国だから政治行政はすべて計画的であり、そのためには統計を完備せねばならないのでよろしく」という事らしい。

実際に見聞したところ、この意気ごみでやっているらしいが、当学会で地元学者の研究発表は少ないようである。招待論文発表は約九十分にわたる総合研究が多いが、東大・竹内啓氏の「推定の強靭性」をはじめ、今回は統計の精度に重点を当てたものが多い。寄与論文発表会では、統計数理研究所の松下嘉米男氏が座長をつとめ、日本人発表も多かった。総理府統計局長・河村氏が一緒だったおかげで、日本大使館主催の夕食会に招かれ、山海の珍味をたらふくご馳走になった。小高公使夫妻のお話では、対日感情は大変よく、日本商社の活躍が目ざましいそうである。

週末の一泊旅行で、古都クラカフへ出かけた。

クラカフ大学数学教室の中庭は古城か僧院のようで印象深い。大学内に大きな教会があってちょうど結婚式を終えた新婚夫婦一行に出くわした。その服装やふんいきは西欧諸国とまったく同じである。

気がついてみると、同国の人達は我々に対して大変気をつかっていたようである。学会の記念切手を発行し、空港の税関も我々だけはフリーパスであった。八日に空路コペンハーゲンに出て、二日後列車で西独ゲッチンゲンに大学構内のC・F・ガウス（十八世紀の大数学者）の墓参りをしたあと同月、本学機械工学科に就任された町山忠弘教授のお力ぞえで実現したもの。かなり貴重な交献が多数あるとのこと。

空を舞う、新井君

去る三月十八日、グァム島で行われたアメリカ二百年記念「スカイダイビング太平洋競技会」で、本学建築学科三年、新井誠君が初級部門で二位という輝しい成績をおさめた。このニュースは、当地の新聞、「パシフィックデイリーニューズ」に報じられた。

新井君は、現在、日本学生スポーツパラシュート連盟に所属しており、一年以上にわたる降下訓練を積み重ねて、今回の参加となったもの。日本人の参加は一五名。

パラシュート競技は、地上のターゲット（目標地点）にいかにうまく降下するかを競うもので、飛行機から地上へ落下するまで、空中での技術が大きくものをいう競技だ。パラシュートの技術段階はAからDまである。

パラシュート競技は、日本では歴史が浅いスポーツだが、最近はかなりの脚光を浴びている。

新井君は、数少い降下員の一人で、青空にぽっかりうかぶ雲を見つめながら、こう語ってくれた。

「一年前から本格的にパラシュート競技に取り組みました。やり始めは、やはり恐怖心がありましたが、いまでは降下回数も三十数回にもおよび、実に爽快な気分でスカイダイビングをあじわっています。ここまでくれば、D級ライセンスをめざして将来も続けて行くつもりです。そして、学友仲間にも参加を呼びかけて、一緒に空を舞いたいものです」。

アドバイザー・グループの利用を

新入生のアドバイザー・グループが近々決定する。〝受験地獄〟の反動からくると見られる〝五月病〟とかいう奇怪な病が横行する季節。単身故郷を離れ、大学の門を叩いたものの、高校と大学の環境の違いに、はたまた友もない異境の地に一人寂しく思い悩む自分に、どう対処したらよいのか知るすべもなく、自閉的な状態におかれている新入生諸君が少なからずいるのではないだろうか。

アドバイザー・システムは、このように学生個々人が抱える諸問題を、学生当事者とグループ毎に配属される教員とで、話し合いや相談をすることによって、問題解決の一助にするものだ。また、グループディスカッションや懇談会などを通して、教員との交流や学生相互間の親睦も計る。ただ、この制度に対して学生諸君が消極的な逃げ腰の姿勢をとるのでは、その存在意義も皆無に等しい。

キャンパスライフの充実した内容を謳るためにも、個々人の積極的成長を実現させるためにも、アドバイザー・システムを大いに活用して〝談論風発〟のグループにしてもらいたいものだ。

早大から図書寄贈

最近、早稲田大学図書館から本学図書館へ、和雑誌、洋雑誌あわせて一万三百冊におよぶ図書の寄贈があった。これは、元早稲田大学理工学研究所の教授で、この四八―四九%、つまり、約半分を軍事費につぎこんでいました。第二次大戦後は軍事費の分担が著しく減少したことが、経済発展の大きな動機となりましたが、オイル・ショックによって一度に転落したわけです。資源をもたぬ、経済大国の悲劇といえましょうが、オイルショックの後も、資源のない日本が、代替エネルギーの対策に世界の中で最も消極的であったことは、どういうことでしょうか。一番手近にある原子力開発でさえ、国民的コンセンサスが得られないでかねないことから、今後の経済社会に進出するには薬物ですの成長はかつての高度のものはもはや考えられないし、考えるべきでないと思います。つまり、六%以内の安定成長がよいと考えられていますが、当分は成長率ゼロの落込みをもりかえすのに大変と考えられるので諸君にもその覚悟が必要であります。

その二は、国際協力の一環として、海外とくに低開発国への技術援助を考える必要があります。日本は、外国に援助できるほどの高度の技術をもっていますが、問題となるのは、独創性であります。常に自己反省を欠かさないようにしていただきたい。そして、読書に親しんでほしいと思います。

夏目漱石が正岡子規に送った手紙の一節に、「人間の教養は読書と体験によって養われる」とありますが、教養とは単なる知識の集積ではありません。物事を正確に判断し、実行できるような思考力をもつことであります。この能力の一半は読書によるわけですが、読書は時間の余裕がなければできない、というものであります。ラジウム発見者として著名なキューリ夫人の言葉に「暇ができたら読書するなど考えても、それは決してできるものではない。そんな考えでいる者には、おそらく読書の時はこないであろう」というのがあります。どんなに忙しい人でも、その意志があれば読書の時間をつくれるのであります。もっとも読書をして、ただ読みっぱなしにするのではなく、何らかの教示を受けたらよく熟考して、それを自分の血と肉にされて、将来の活躍の糧とされることを望みます。最近、生涯教育という言葉をよく聞きますが社会人としての諸君の勉強はこれから始まるのです。

老いて悔いのないように、十分に精励されることを望みまして、わたくしの告辞を終らせていただきます。

第六回卒業式 国際協力の時代に

藤岡通夫学長告辞

本日は、本学の第六回の卒業式を迎えることになりました。

諸君、卒業おめでとうございます。ご両親をはじめ、ご家族一同お喜びのこととお祝い申しあげます。明日よりいよいよ社会人として、新しい人生に門出されるわけですが、諸君を迎える社会は、ご承知のように、不況の風が吹きまくっており、就職の状況も芳しくなくてお気の毒です。このような時期に社会に出るにあたって、諸君はこのような日本の状況をどう認識したらよいのか。よく考えてみる必要があります。

日本は昭和三十年頃から、高度経済成長の波に乗って、経済大国へのしあがりました。わたくしは、三年前のこの卒業式でこの経済発展は異状なものであるといいました。それがいつまで続くかは疑問であると申しましたが、案外にも早く、石油シヨックが起りました。資源のない日本は、世界の中で最も大きな打撃を受けました。その打撃によって起った世界的な不況と相俟って、中小企業の倒産、失業の増加はご承知の通りです。

近年、アメリカの不況は、日本を上まわるものでありましたが、昨年の後半から立ち直りつつあるといわれています。以前は、日本はアメリカ経済の影響を受けることが大で、アメリカ経済がカゼをひくと、日本は肺炎になるといわれました。しかし、今日は、日本も経済大国になっており、日本とアメリカ二国の生産だけで、非共産圏全体の生産の五二%を占めるといわれる日本の動向は、世界の経済に大きな影響を与えます。とくに、北は韓国から南はオーストラリアまで、日本が力ゼをひくと、肺炎にもなりかねない状況です。

ところで、かつて日本経済は年率一一―一二%という超高度の実質経済成長を続けました。しかし、このことは、日本がいかに軍備放棄とか、平和の推進を唱えても、その成長自体だけで世界に一つの無視できない、重大な政治的・軍事的問題を発